

切花ヒマワリの安定生産に向けた取組

■JA香川県綾歌南部花き部会 ヒマワリ生産者■

(中讃農業改良普及センター 竹内小百合、○樫林美穂)

●対象の概要

綾歌南部地区は、水稻や麦のほか、イチゴやアスパラガス、カーネーションなどの施設園芸、ブロッコリー、ナバナ、カキなどの露地品目を組み合わせ合わせた複合経営が行われている。JA綾坂地区営農センターでは、柿やブロッコリー、ナバナなどの出荷がない夏季の間作作物として女性や高齢者でも負担なく栽培に取り組める切花ヒマワリの導入を平成24年度から推進してきた。6月第3日曜の父の日出荷作型で、露地栽培を中心に共選共販を行っている。今年度は、新規生産者2名を含む8名(約12a)が栽培に取り組んだ。

●課題を取り上げた理由

香川県における切花ヒマワリ生産は、作付面積、出荷量ともに全国3位で、県では生産拡大を目指し推進を図っている。

綾歌南部地区でも生産拡大を推進する中、栽培経験が少ない部会員からは、栽培技術の習得と向上を望む意見が寄せられた。また、栽培年数が長いほ場ではべと病による農薬散布や出荷ロスの増加といった問題もみられるようになった。

一方、市場からは、同地区の主力品種である「サンリッチオレンジ」と「サンリッチレモン」の2品種(いずれもタキイ種苗(株))以外のバリエーションを増やしてほしいとの要望があがったことから、新品種導入に向け、品種特性や市場性の調査が必要であると考えられた。

これらの課題を解決し、ヒマワリの安定生産を図るため、JAと連携しほ場巡回等を通じた生産者への栽培支援や展示圃設置によるべと病対策、新たな推進品種の検討に取り組んだ。

●普及活動の経過

1 個別カルテに基づく巡回指導および講習会の開催

JA担当者と連携し、栽培開始前の2月に栽培講習会を実施した。栽培経験が少ない新規生産者

への指導を念頭に、栽培の基礎知識や生育ステージに応じた管理ポイントについて説明した。また、全ほ場を対象に、土壌分析に基づく基肥の指導を行った。

栽培期間中JA担当者と連携して、週1回全生産者のほ場巡回を行うとともに、生産者個々のカルテを作成し、生育状況や病害虫の発生状況等を記録することで、生産者毎の状況に応じた細かな指導に役立てた。

5月下旬の出荷開始前には、市場関係者も招いて講習会を開催した。普及センター、JA担当者から栽培概要、展示ほの途中経過、出荷方法の説明を行うとともに、市場関係者と生産者との情報交換を図った。



現地の個別巡回指導

2 べと病耐性品種の検討

べと病対策として、当地域の主力品種である「サンリッチオレンジ」と同等の形質を持ったべと病耐性品種「F1DMRサンリッチオレンジ」について導入の検討を行った。

べと病の多発ほ場1カ所で耐病性品種「F1DMRサンリッチオレンジ」と「サンリッチオレンジ」を対照品種とした展示圃を設置し、比較栽培試験を実施した。生育期間中は、定期的にべと病の発病状況および切花の品質調査を行った。

3 新規品種「ビンセントオレンジ」の検討

新たな推進品種として、他産地での導入実績が

あり、栽培管理が容易で市場関係者の認知度が高い「ビンセントオレンジ」（株）サカタのタネを選定した。

展示圃を1カ所設置し、慣行の管理による試作栽培を行い、特性調査を行うとともに販売状況について情報収集・分析を行った。

●普及活動の成果

1 個別カルテに基づく巡回指導および講習会の開催

ヒマワリの栽培期間は約2か月と短い、週1回の定期的な巡回を行うことで生産者と信頼関係が構築された。巡回後には、カルテを作成し、栽培状況を詳細に把握することで、次の巡回時に生産者個々の栽培ポイントに応じた指導を行うことができた。

普及センターとJAの連携による継続した支援の結果、生産者数及び出荷数量は平成27年から令和元年には2倍に増加した。さらに、来年度は新規生産者3名が加わる予定で、産地拡大に繋がっている。

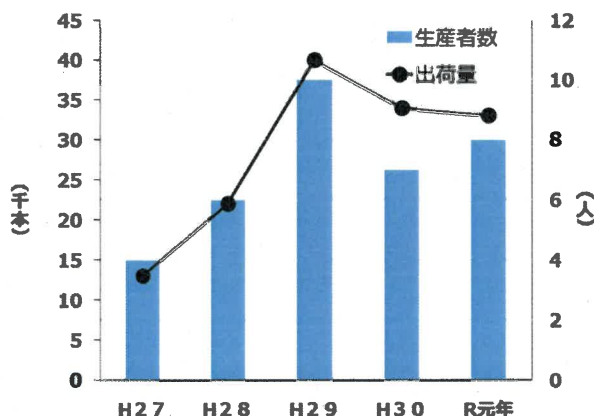


図-1 出荷量と生産者数の推移

2 べと病耐病性品種の検討

現地試験の結果、べと病耐病性品種「F₁DMRサンリッチオレンジ」は、生育期間を通じて発病せず、対照品種「サンリッチオレンジ」は、約20%発生した。耐病性品種の切花品質は「サンリッチオレンジ」と同等程度であった。このことから、べと病発生は場に耐病性品種を導入することは有効であると考えられた。

この結果を踏まえ、JA担当者および被害が大きい農家と協議したところ、種苗費が耐病性品種の方が若干高いが、防除の軽減、ロス率低下のメリットを考え、次作では被害農家2戸が全てを耐病性品種に変更することにした。

表-1 各品種のべと病発病株率

品種	播種後29日目	播種後42日目	播種後49日目	播種後55日目	播種後73日目
F ₁ DMRサンリッチオレンジ (耐病性品種)	0%	0%	0%	0%	0%
サンリッチオレンジ	0%	22%	24%	24%	24%

3 新規品種「ビンセントオレンジ」の検討

「ビンセントオレンジ」は「サンリッチオレンジ」に比べて、開花が早く生育が揃うことから、労力や作型分散も期待できるとともに有利販売に繋がると考えられた。販売単価については、5月26日～31日の短期間での出荷実績であるが、高単価で推移した。

この結果を踏まえ、JA担当者および生産者と協議したところ、次年度に2戸の生産者が「ビンセントオレンジ」を導入することとなった。

●今後の普及活動の課題

今年度の活動により、安定生産や新規品種導入による有利販売へ向けた動きに繋げることができたが、今年度の販売額は昨年より減少した。

その要因の一つは、他県産地の参入で市場への供給が過多になり、単価が下落した影響と思われる。さらに同地区の出荷内訳は、販売単価が高い秀6 cm、秀8 cm（花茎6～8 cm）級の出荷割合が低かった。今後は売上げ向上を目指し、秀6～8 cm級の割合を増やすための栽培指導や栽植方法の検討が必要である。また、品種や時期による単価差も大きいことから品種や出荷時期を分散し、リスクを回避するとともに市場ニーズを捉えた計画生産を行うことが重要である。今後も産地や関係機関と連携し、情報共有を図りながら支援する予定である。

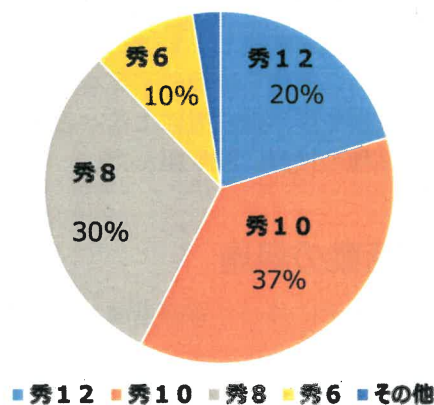


図-2 等階級別出荷割合